

第7回講義 (20160610)

§ 6 New Relativism

1 新相対主義とは何か

#新相対主義は、文脈主義と相対主義を次のように区別する。

文脈主義は、道徳、美学、認識論などにおいて、道徳的、美学的、認識論的概念が、指標詞に似ているとみる。つまり、それらは発話の文脈によって異なる意味をもちうることを認める。しかし、同一の文脈で発話された同一の文に、明白な真の不一致が生じることを説明することはできない。

それに対して、新相対主義者、それを説明できる。その説明の際に、Kaplan による<文の使用の文脈（あるいは文の発話の文脈）と評価の状況（あるいは値踏みの状況）の区別>を利用する。

そこで準備作業として、カプランの指示詞の理論を説明しよう。

2 Kaplan 'Demonstratives'

(以下の引用ページ数は、Almog, Perry & Wettstein (ed.) Themes From Kaplan, Oxford UP. 1989 による)

この論文でカプランは、指示詞を含む文の意味について説明する。彼は指示詞 demonstratives を、指さしなどの指示行為を伴う必要のないものと必要のあるものに区別する。前者を「純粋指標詞」(pure indexicals)とよび、後者を「真の指示詞」(genuine demonstratives)

とよぶ。

純粋指標詞には、「私」「今」「ここ」などがある。

真の指示詞には、「これ」「あれ」などがある。

これらの用語は、文法用語でいう代名詞や副詞を含んでいる。通常の文法用語とは異なる仕方で用いられており、哲学的意味論での用語である。またこれらの語は、照応的用法ももつが、この論文では指示的な用法のみが考察されている。

彼は、フレーゲの Sinn (意義) と Bedeutung (意味) の二分法にかえて、意義を意味性格 (Character) と内容 (Content) に分け、意味性格と内容と外延(extention)の三分法を採用する。

これらの指示詞はそれぞれ、意味性格 (Character) をもつ。例えば

「私」は、それを含む発話の話し手を指示する。

「今」は、それを含む発話が行われる時間を指示する。

「ここ」は、それを含む発話が行われる場所を指示する。

「現実に」(actually)は、それを含む発話が行われる世界を指示する。

指示詞 d は、指示行為 δ をもとなうだろう。それは次のように表現される。

$d[\delta]$

完全な指示詞の意味性格は、次の意味論的規則によって与えられる。

「どの文脈においても、 $d[\delta]$ は、もし c における δ の被指示項 (demonstratum) があるなら、それを指示し、さもなければ何も指示しない」 527

意味性格と内容は、次のような関数である。

Character 意味性格 : Cintexts 文脈 \Rightarrow Contents 内容

Contents 内容 : Circumstances 状況 \Rightarrow Extentions 外延

あるいは、もっとなじみの言語で言うと

Meaning 意味+Context 文脈 ⇒ Intention 内包

Intention 内包+Possible World 可能世界 ⇒ Extension 外延

例文1 I am here now.

例文2 □I am here now.

例文3 Socrates was a philosopher.

例文4 The wife of Socrates was Xanthippe.

例文5 That is my car.

例文6 Licorice is tasty.

使用の文脈は通常、話し手 *s*、時間 *t*、場所 *p*、世界 *w* の 4 項組で示される $\langle s, t, p, w \rangle$

値踏みの状況は、時間 *w* と世界 *t* で示される。値踏みの状況は、一般的には、agents(主体、行為者)を含まない (cf. 495)

3 Kaplan の使用の文脈と値踏みの状況の区別による文脈主義と相対主義の区別

(<http://plato.stanford.edu/archives/spr2016/entries/relativism/> from the Spring 2016 Edition)

The leading proponents are Max Kölbel (2003, 2004), Peter Laserson (2005), Crispin Wright (2006) and, in particular, John MacFarlane (2005b, 2007, 2014).

「言説 *D* の領域での発話に対する真理相対主義 (Macfarlane) によると、話し手 *S* のある言説の領域 *D* での発話 *u* は、評価の文脈に依存する真理値を持つ、つまり短く言うと、*S* が主張すること *u* は、真理相対主義的 *D* 意味論によれば、評価者の *D* 基準が特定されるときのみ、真理値をもつ。そのような基準の指定をはなれると、*S* の主張 *u* は真理値を欠く、それは指標的表現「その納屋は近くにある」が、使用の文脈に関する文脈的事実から独立に真理値を持ちえないのと同様である。」

「文脈主義者では、使用の文脈によって、基準が与えられるが、相対主義者にとっては、使用の文脈と独立に、値踏みの文脈によって与えられる。(MacFarlane は、それを評価(evaluation)の文脈という。)」

「味覚の例で説明しよう。A は「プレッツェルは、おいしい」といい、B は「プレッツェルは、おいしくない」という。意味論的不変主義者 (invariantist) (味の述語の真理値は、文脈感受的ではないと考える) は、上の対立を、どちらかが誤りであると考え、文脈主義者と真理相対主義者は、＜少なくとも一方が間違っている＞と結論することを避ける。文脈主義者は、A の発話の内容は、A の基準 (非指標的文脈主義) をもつ、と主張する。B は、B の基準を持つ。このやり方は、少なくとも一方が偽であるという帰結をさける。しかし、これは (相対主義者が指摘するように) A と B が同意しない、同一の内容があるという私たちの直観を説明できない。新相対主義は、味覚言説の主観性と上記の対立が本物の不一致を構成するという直観を、ともに保存することができる。彼らは、まず、A が肯定し B が否定している一つの命題がある、と主張する。」